

僕たちがこの小屋にきて七日目の朝。 マリーが外へ出てくると同時に、すべての作業が終わった。 ——道が、開いた。

「おはようございます」

「マリー、終わったよ」

「……はい、ありがとうございます」

開通した道を見つめたマリーは、意を決したように言う。

「私、魔女になります」

早朝の涼しい風が、僕たちの間を吹き抜けていく。

「スミレはどうしますか?」

「僕は……」

握りしめた拳が痛い。 しかし、それを解くことができずにいる。

「僕は君が魔女になっても、まだ、一緒にいたいと思ってる」

あれほど魔法を扱う者に対して抵抗があったのに、マリー が魔女になっても、傍にいたいと思った。

「私も、スミレが傍にいてくれたら安心できます」







「本当に?」

「はい。あの雨の夜からずっと、そう思っていました」「そう、か」

「それじゃあ、朝ごはんを食べませんか?」

「その前に体を洗わせて」

「もちろんです。昨日食べ損ねてしまったので、スミレの ご飯が食べたいです」

「うん。わかった」

「なにか手伝えることはありますか?」

「じゃあ、鍋にお湯を沸かしておいて」

「わかりました!」

マリーは微笑みを残し、小屋へ戻っていく。 僕は井戸水を汲み、土だらけの体を流した。

テーブルに座り、スミレと向かい合ってご飯を食べる。 彼のご飯を口にすることも、この光景ももう見られないと 思っていた。

だから、私といたいと言ってくれたときは、どうしようもなくうれしくて。

ご飯を食べ終え、お茶を飲みながら司祭の到着を待つ。 それからしばらくして、扉を叩く音がした。

「行ってきますね」







小屋で待っていてもらうようスミレに伝えて、外へ出た。 森の奥には不釣り合いなローブを着た司祭が三人、立って いる。

「マリー様、お久しぶりです」

|はい|

「これから魔女の儀をはじめます。ついてきてください」

そうして、辿り着いた先で儀式がはじまった。

文字が書かれた石板に乗り、私は祈りを捧げるような姿勢 をとる。

司祭たちが私を囲むように立ち、口語とも違う言葉を唱え た途端、肩が熱くなった。

その熱が体中をめぐり、頭の中に、言葉が浮かんでくる。 『雨を降らす魔法、傷を癒す魔法を授ける』と。

そうして儀式が終わると、感覚で理解した。

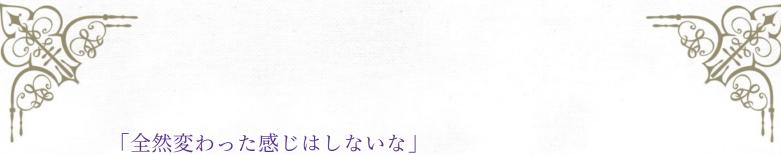
魔法の使い方、そして、その解き方を。

小屋に戻ってきたマリーは僕に駆け寄ってくる。

「儀式は無事に終わりました。私も晴れて魔女になりまし たよし

「そっか、おめでとう」 「ありがとうございます」





「全然変わった感じはしないな」
「本当ですね。でも、スミレ。今の私なら、あなたにかけられた魔法を解くことができます」
「本当に……?」

聞き返すと、マリーの瞳が少しだけ伏せられた。

「はい。スミレはどうしたいですか?」

魔法を解けば、人に戻ることができる。 虐げられることもなく、ありのままの時間を生きることが できる。 魔法を解くか、解かないか、僕たちは話し合うことにした。



「決めたよ」

僕は机の上に組んだ手に力を込めた。



